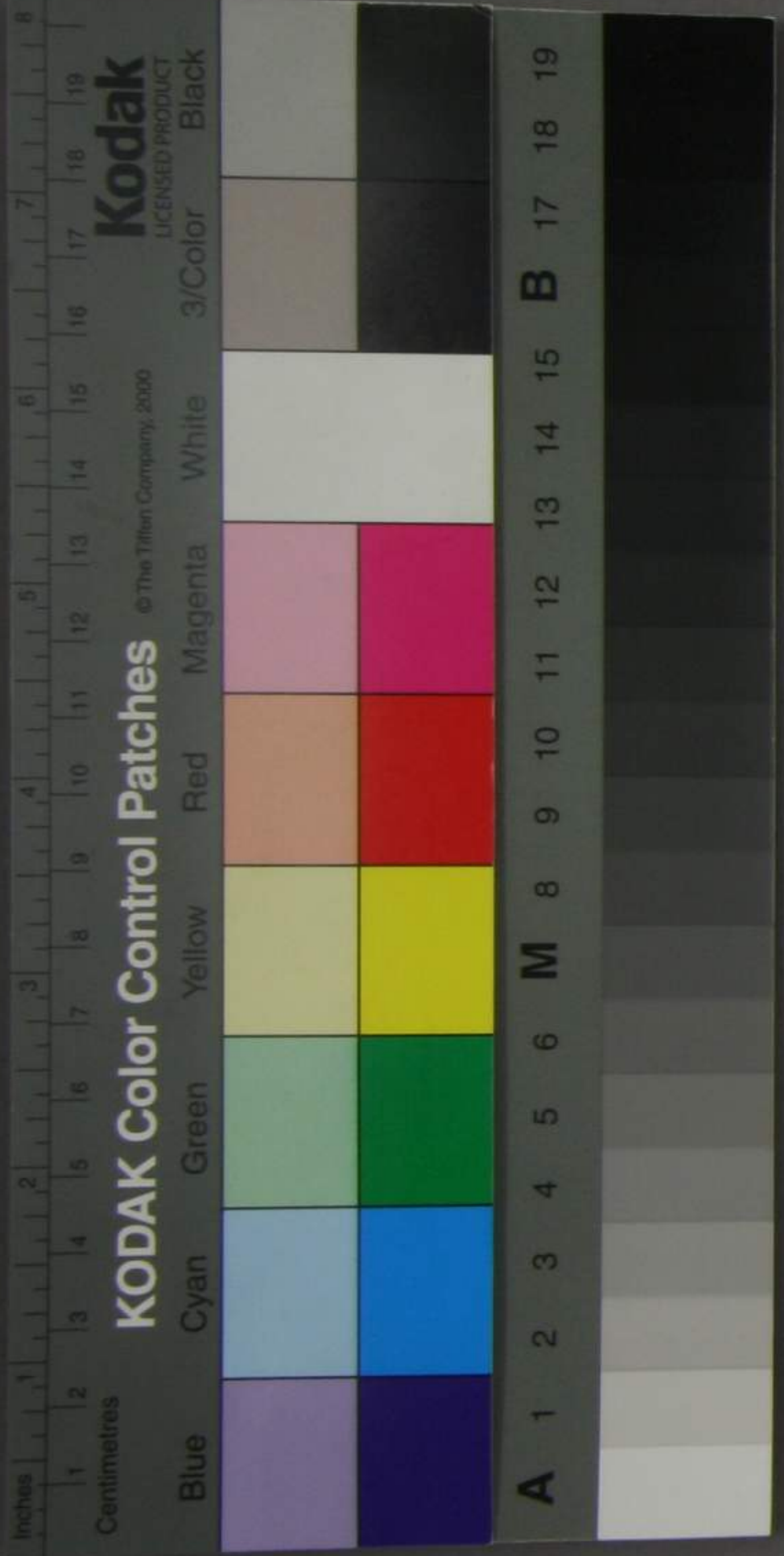


114
A 2484



夫會計ノ要旨タル未ク量入為出ノ外ニ出ス方今
官省經費ノ如キ既ニ庶堂ノ成算アリ特リ怪
ム地方經費ノ如キ固ヨリ常備定額ノ名アリ
リト雖モ其實無シ如何トナレハ臨時ノ事
故アリ定額ノ不足ヨ申請スル時其事理允
當ナレハ支給セサルヲ得ス竟ニ隨テ請ヒ隨テ
給スルノ勢ニ馴致シ其額ヲ超ユル三四倍或
ハ殆ト十倍ニ至レルアリ故ニ定額ノ稱ハ有名
無実ニ属シ此額ヲ以テ一歳經費ノ概數ヲ算

大正十一年四月
大正十一年四月



スル能ハス。是他ニシテ費額ノ成算其宜ヲ得サル
ニ回ル。今ヤ開化進歩ノ際百般ノ事業總テ
創設ヲ要スルヲ以テ地方ノ經費日月増加ノ
勢アリ。此時ニ當リ量為ノ成算前定セザレハ
大計ヲ失スルノ憂アラシコトヲ思ル。某去歲立則
ニ在ル。日口米永ヲ以テ其廳費ニ供セシコトヲ建
言ス。庶議之ヲ可トシ其方法ヲ施設ス可キノ
命アリ。其調理ノ際ニ方リ租額ヲ經緯ノニ途ニ
區分シ經租ヲ以テ一般ノ要費ニ供シ緯租ヲ以テ
地方廳費ニ充ツルノ議興ル而シテ經緯所屬

ノ區別ヲ定メント欲シ各種租稅ノ名稱、擬リ區
分スル時ハ甲縣ニ寡キモノ乙縣ニ多ク彼ハ一
歳ヲ經常スルモ猶餘リアリトシ此ハ半年モ支
ユル能ハサルモノアリ故ニ此法ヲ行ハント欲スルヤ
別ニ每縣經費ノ概數ヲ定メ彼ノ有餘ヲ取
リ此ノ不足ヲ補ハサルヲ得タルヨリ實際行
レカタキヲ以テ其議竟ニ中止スルニ至レリ。頃
日人口又別ヲ以テ支給スヘキノ議ヲ上申ス。此
法タル石高ヲ以テ起算セシニ比スレハ稍適実
ニ歸スト雖モ其金額ノ如キハ旧石高ニ不賦セシ

額ヲ
原據トナシ算出セシモノニシテ乃チ石高廢稱ノ後
分合廢置ノ舉アルトキ旧法ノ因仍ス可カラサルヲ
以テ暫ク一ノ換法ヲ設ケシ而已ナレハ常額ノ不足
ニ於ケル依然旧ノ如シ夫レ如此費用概額定マラス
日亦一日何ヲ以テ全國會計ノ目途ヲ立キ定メ
憂慮痛心ノ極ト云ヘシ茲ニ於テ或ハ言ハシ各地
方ヨリ周歲經費ノ概數ヲ上申セシメ其額ヲ定
メハ頗ル適實ニ歸セント是決シテ然ラス如何トナ
レハ各自任所ノ費額ヲ算スル必ス大ナル異同ヲ
生セン今試ニ既往ヲ以テ其證一二ヲ舉ニ甲縣ノ

旅費ヲ支給スル規則ニ依レルモ乙縣ハ適宜ト即減
シテ三分ノ一或ハ四分ノ一ヲ給シ彼ハ支廳ヲ三所
ニ設クルモ此ハ一所ニ置アリ將來施政ノ方法
モ亦各人ノ異見ニ因リ順序ノ緩急アリ其緩
急ニ因ツテ經費ノ多寡ヲ生セン故ニ地方官
ノ目的ヲ上申セシムルモ其當否ニ至テハ決シテ
取捨ニ難キモノアラシ因テ審案考覈スルニ一
歳入ル所有限ノ租稅ヲ以テ無窮ノ經費ニ
供スル固ヨリ一定ノ界限ヲ設ケル可ラサルハ
論ヲ俟タズ抑鎌倉以降守護地頭ノ公費

ニ於ル前議口米ノ如キ方法アリ今既往ノ成績
ヲ推考シ政府凡百ノ經費ニ供スル全國ノ稅
額ヲ以テスルノ理ヲ推及セハ地方廳費ノ如キモ
其管内ノ稅額幾部ヲ以テ分給スルノ方法ヲ
設テ地景ニ仍テ異同アル堤防費管外旅費
或ハ臨時ニ屬スル諸費ノ如キハ精數ノ実算
ヲ計量シ之ヲ別途ニ支給シ其他普通ノ廳費
ハ總テ分一ノ給額ヲ以テ其地方官ニ委任ス可シ
元來地方事務ノ繁閑ハ概テ田宅口數ノ多寡
ニ依ル而シテ租稅ノ多寡モ又田宅口數ニ因テ

増減アル勿論ナレハ稅額ノ分一ヲ以テ諸費ノ
額ヲ定ムルニ於テ條理妥當ヲ得ヘシ然リ而
シテ其出納ノ如キ之ヲ地方官ニ委任スルトキハ
其額アリト雖モ權束ノ弊ナク有為ノ良吏大
ニ其材力ヲ伸ヘ治効ヲ奏スルニ至ラン茲ニ於テ
量為ノ目途始テ立テ理財ノ道隨テ奉ラレ
實ニ是レ兩全ノ方法此外ニ出ツ可カラス其割
賦ノ如キハ本年ノ經費上計ヲ族テ猶斟酌
較量精細具狀ス可シ先其要旨ヲ陳述シ以
テ仰高裁宜ク採用アラニテヲ希望ス願

首謹言

明治六年十一月

検査頭安藤就高

大
雅
堂